

SHOW-HISYシネマフルーツ

★★★★★

沈黙の艦隊

2023年／日本映画

配給：東宝／113分

2023（令和5）年10月5日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

2023-11-4

監督：吉野耕平

原作：かわぐちかいじ『沈黙の艦隊』

出演：大沢たかお／玉木宏／上戸彩

／ユースケ・サンタマリア／

中村倫也／中村蒼／松岡広

大／前原滉／水川あさみ／

岡本多緒／手塚とおる／酒

向芳／笛野高史／アレク

ス・ポー／ヴィッчи／リック

・アムスバリー／橋爪功／

夏川結衣／江口洋介

みどり

かわぐちかいじの漫画『沈黙の艦隊』と私との出会いは、1988年に入所してきた40期の女性弁護士の紹介によるもの。そこには、日本が原子力潜水艦を保有！その原潜が核武装！そして、何と独立国やまとの独立宣言！等々の驚愕すべき内容が満載！この壮大な世界観は、平和に酔い、バブルに酔い、北新地での酒と歌の日々に酔っていた私にとって大衝撃だった。

『キングダム』の実写化は可能だが、『沈黙の艦隊』の実写化は到底ムリ。なぜなら、日本はまだまだ朝日新聞的な平和主義（平和観？）が横行し、原潜や核武装化をテーマにすること自体がタブーなのだから。私はそう思っていたが、『キングダム』の王騎役で大奮闘する俳優・大沢たかおの努力もあって、ついにそれが実現！

冒頭の展開や海江田艦長と深町艦長との対比は原作どおり。日本政府首脳陣の描き方は今風にアレンジされているが、中盤に登場する米太平洋艦隊のド真ん中に浮上する〈やまと〉艦長海江田の核武装をバックにした、独特的“交渉術”は原作とほぼ同じだ。こりゃ面白い！こりゃ必見！2022年12月に安全保障関連三文書を改訂し、安保存衛についての真面目な（本格的な）議論が始まろうとしている今、本作の公開は実にタイミングだ。

折りしも、北朝鮮が潜水艦を保有！台湾も自前の潜水艦「海鯨」の進水式を行った。さあ、今後、原潜〈やまと〉はどこへ？原作のように、海江田は米本土近くに現れ、米国大統領との“首脳会談”を要求するの？そんな興味ある展開を大スクリーン上で観るためにには、本作のシリーズ化が不可欠だ。『キングダム』は既に3作が公開され、第4作も予定されている。今後は毎年夏にシリーズ化された両作をタップリと楽しみたいものだ。

■□■待望の原作が遂に映画化！こりや必見！シリーズ化も！■□■

私が週刊モーニングで連載していた、かわぐちかくいじ作の漫画『沈黙の艦隊』の存在を知ったのは、1979年に独立して自分の事務所を持った後、事務員の数も事務所の規模も拡大を続け、はじめて38期の“イソ弁”を迎えた中で毎日“超”がつくほど忙しい弁護士生活を送っていた頃だ。1988年、私の事務所には新たに40期の弁護士2人が“イソ弁”として入所したが、そのうちの1人が同作のファンであったことから、私も同作の存在と、その面白さにのめり込んでいった。

私が映画評論を書き始めたのは2001年からで、1988年当時は映画を見るヒマなど全くなかったが、もともと“潜水艦モノ”は大好きだった。同作は、そんな私にとって潜水艦モノの面白さはもとより、核武装をし(?)、世界一の原子力潜水艦〈シーバット〉で、“独立国やまと”を宣言するという壮大な世界観は圧倒的な面白さだった。既刊本を一気に読み破した私は、以降、新刊本が発表される度に読み進んでいたから、きっといつか本作は映画化されるものと確信していた。それが2023年9月の今、やっと実現！

■□■潜水艦が米国原潜と衝突！76名全員死亡！その真偽は？■□■

安倍政権下でやっと実現することができた「平和安全法制」を、岸田政権は「防衛三文書の改訂」という形で“進化”させたが、国民はその実態をどこまで知っているの？また、それらの情報の真偽は？本作冒頭は、『沈黙の艦隊』が最初に出版された時に日本国中が驚愕した、「日本の通常型潜水艦が、米国の原子力潜水艦に衝突！76名全員死亡！」という設定だが、その情報の真偽は？

米国の原潜に衝突したという日本の通常型潜水艦は〈ゆうなみ〉、その艦長は海江田四郎（大沢たかお）で、乗組員は副長の山中栄治（中村蒼）、ソナーマンの溝口拓男（前原滉）、IC員の入江寛士（松岡広大）たち76名だ。それを聞いた日本政府の首脳は、気弱な内閣総理大臣・竹上登志雄（笛野高史）、敏腕の内閣官房長官・海原渉（江口洋介）、そして官房長官の父親で「影の総理」と呼ばれている官房参与・海原大悟（橋爪功）たち、さらに、防衛大臣の曾根崎仁美（夏川結衣）、外務大臣の影山誠司（酒向芳）、統合幕僚長の赤垣浩次（手塚とおる）、海原渉の秘書の舟尾亮子（岡本多緒）たちだ。

他方、米国側は、大統領ニコラス・ベネット（リック・アムスパリー）、太平洋艦隊司令官ローガン・スタイガー（アレクス・ポーノヴィッチ）たちだが・・・。

■□■事故は真っ赤な嘘！目的は原潜〈シーバット〉の入手！■□■

本作はかわぐちかくいじの漫画を原作としたものだが、決して「たかが漫画！」と侮ってはならない。その壮大な世界観をスクリーン上に再現させるためには、潜水艦そのものの撮影技術はもとより、日米両政府の動きをリアルに表現する必要がある。また、民主主義国日本ではマスコミのあり方が重要だから、本作でそれを一手に引き受ける報道キャスター

一・市谷裕美（上戸彩）の役割にも注目する必要がある。

他方、映画の面白さを際立たせるのはライバルの存在だが、本作で海江田の良き友、良きライバルとして登場するのが、潜水艦〈たつなみ〉の艦長・深町洋（玉木宏）だ。彼は海江田の後輩で、何よりも海江田の優秀さを知っている男だから、誰よりも、潜水艦〈ゆうなみ〉の操縦ミスによる米原潜への衝突事故を疑ったのがこの男だ。彼が海自一のソナーマン・南波栄一（ユースケ・サンタマリア）、副長の速水貴子（水川あさみ）と共に、何度も何度も事故時のソナー音の“解析”を続けていくと・・・。

案の定、〈ゆうなみ〉の米原潜への衝突事故は、日米両政府が仕組んだ国民に対する真っ赤な嘘で、海江田以下 76 名の乗組員が全員脱出した後、〈ゆうなみ〉は現実に沈没させられたことが判明したが、それは一体何のため？それは、かねてからの日本政府が念願だった、日米で極秘裏に開発された最新鋭の原子力潜水艦〈シーバット〉を入手するための“偽装工作”だったからビックリ！

■□■ 〈シーバット〉と海江田の所属は？その任務は？ ■□■

〈シーバット〉の建造費がいくらかは明らかにされないが、日米が共同で極秘裏に開発してきた〈シーバット〉の建造費はすべて日本持ちだったらしい。しかも、また、〈シーバット〉の艦長は海江田四郎、そして乗組員は全員〈ゆうなみ〉の乗組員だが、その所属は米国第 7 艦隊だ。つまり、海江田たち 76 名は全員死亡したという偽装工作のうえで、米国第 7 艦隊所属の軍人としてその任務に就くらしい。すると、海江田たち 76 名は、この先一生、死ぬまで日本の家族と連絡を取ることも不可能という、何とも過酷な運命を受け入れたことになる。戦国時代、伊賀の忍者たちは一生自分の身分を隠して、それぞれの“忍者”としての任務に就いたそうだが、まさに〈シーバット〉は日本政府が建造費を提供したにも関わらず、米艦隊所属という奇数な運命を背負った落とし子ということになるし、海江田以下 76 名は戸籍から抹消された男女ということになるわけだ。

しかし、そんなすごい秘密が本当に守れるの？ そう思っていると、案の定、海江田はデビット・ライアン（ジェフリー・ロウ）を監視官とする〈シーバット〉の試験航行の中で、ライアンの身柄を拘束し、第 7 艦隊の指揮下から離脱、独自の行動を取り始めたから、アレレ・・・。これでは、極秘裏に〈シーバット〉の試験航行を米国第 7 艦隊の幹部たちと共に見送った曾根崎防衛大臣の顔は丸潰れだ。

急遽召集された閣議（プラス α）への出席者全員は、何よりも海江田の意図が見えないことに苛立ちを見せつつ、〈たつなみ〉艦長の深町に対して〈シーバット〉の追跡を命じることに。この「追跡」は命令の内容が不明確だが、それに対して、米国第 7 艦隊の命令は明確だ。すなわち、太平洋艦隊司令長官ローガン・スタイルーからは、「自らの意思で第 7 艦隊の帰属を離れた〈シーバット〉を撃沈せよ」との命令が下されたばかりか、第七艦隊の総力を挙げて〈シーバット〉一艦の撃沈の任務に向かうことになる。

■口■太平洋艦隊のド真ん中に浮上！海江田の狙いは？■口■

私が 1988 年に『沈黙の艦隊』をはじめて読んだ時、何よりも印象に残ったのは〈シーバット〉を乗っ取った（？）海江田艦長が、全世界に向けて「〈シーバット〉は核武装している」と述べたうえ、「我々はここに、独立国“やまと”の建国を宣言する」と述べるところだった。当然、そのシーンは本作のハイライトだから予告編でも使われているが、この“独立宣言”のシーンを大沢たかおはいかなる演技力で魅せているのか？俳優・大沢たかおは、近時、『キングダム』シリーズの「王騎」役で存在感を見せつけているが、本作のそのシーンでは、日本がはじめて入手した原潜の艦長として、キリリとしたカッコ良さを“魅せて”いるので、それに注目！

そんな海江田艦長が指揮を執る原潜〈シーバット〉の動静は、その撃沈を目指す米太平洋艦隊はもとより、米太平洋艦隊よりも前にその捕獲を目指す〈たつなみ〉艦長深町らの興味の的だが、本作中盤では、何と空母を中心として大量の艦船が集結する米太平洋艦隊のド真ん中に〈シーバット〉が浮上し、正々堂々と太平洋艦隊司令官ローガン・スタイガーと会話を交わすので、それに注目！

ローガン・スタイガー司令官は〈シーバット〉への攻撃命令を受けているのだから、近くの軍艦から〈シーバット〉目掛けて大砲を一発ぶつ放せばいいだけだが、それを躊躇したのは、〈シーバット〉が核を積んでいるというのが「本当にウソか？」ということを考えたためだ。彼がそのことに確信を持てず、「万一・・・」と考えたのは当然だが、ひょっとして海江田の狙いはそこに・・・？そこら辺りの、核武装をタテにした海江田の“交渉術”をしつかり確認しながら、本作中盤では「〈シーバット〉 vs 米太平洋艦隊の対決」をしつかり楽しみたい。

■口■潜水艦同士の戦いも存分に！■口■

「潜水艦モノ」では、さまざまな“軍事用語”的他、「潜水艦モノ」特有の専門用語を理解しなければならない。本作では、導入部における「圧潰」をはじめ、「音紋」、「アクティブソナー」、「ソノブイ」等の理解が不可欠だ。

米国太平洋艦隊のド真ん中に浮上して、ローガン・スタイガー司令官との音声での交信を行った海江田が、そこで司令官の要求する通りに降伏するはずはない。さらに、やつと〈シーバット〉に追いつき、海江田との直接対話を要求する〈たつなみ〉艦長深町を、司令室に迎え入れた海江田が、今さら深町の主張に従って“独立宣言”を覆すはずもない。すると、〈シーバット〉から離れた深町の身の安全が確保される距離になった瞬間、太平洋艦隊の大砲が〈シーバット〉に向けてぶつ放されることは確実だ。そこで、当然、海江田は“急速潜航”を命じたが、海上は敵艦だらけだ。さらに、海中には米原潜がうじゃうじゃと潜んでいる。そんな中、〈シーバット〉は無事に逃げおおせることができるのだろうか？

私は潜水艦モノが大好き。とりわけドイツの『U・ボート』シリーズが大好きだが、「潜水艦モノ」の最大の楽しみは、潜水艦と駆逐艦、もしくは潜水艦同士の“対決”という、

手に汗握る緊張感にある。『U・ボート』シリーズのそれはとにかく迫力があったし、『眼下の敵』(57年)のそれも緊張感いっぱいだった。しかし、「〈シーバット〉VS米原潜対決」の醍醐味は如何に?本作では、それも存分に楽しみたい。

■口■核武装をし、独立宣言をした海江田の今後の狙いは?■口■

2020年2月24日に突如ロシアがウクライナ侵攻を開始した後、西欧諸国とアメリカはウクライナへの軍事、経済支援を続けているが、戦争の長期化と近時目立ち始めた“支援疲れ”の中で、密かに「我が意を得たり!」とばかりにほくそ笑み、これまで以上に「核強化路線」をひた走っているのが金正恩率いる北朝鮮だ。北朝鮮では近時、潜水艦を入手したとの情報が流れたが、中国本土からの侵攻に怯える台湾でも、去る9月28日、はじめて自主開発した潜水艦「海鯢」の進水式が高雄市で開かれた。北朝鮮の思惑は全くわからないが、台湾の蔡英文政権は、潜水艦を防衛装備の自前調達を図る「国防自主」の中核とみなしているから、威嚇行為を強める中国軍が台湾を包囲できないようにすることが「海鯢」の主要任務で、対中抑止力を高める狙いがあることは明らかだ。

このように、潜水艦の任務にはさまざまなものがあるが、蓄電のために海面を航行しなければならないディーゼル・エンジンを使う通常型潜水艦と違い、原子力潜水艦は浮上しなくとも良いから、原子力潜水艦の果たす役割はとてもなく大きい。かわぐちかいじが描いた、①日本初の原子力潜水艦〈シーバット〉の誕生、②海江田による〈シーバット〉の乗っ取り、③そして、〈やまと〉と名付けた原潜での“やまと独立宣言”、という『沈黙の艦隊』の物語の根幹は、原潜がそんな、とてつもない能力を備えていることを前提としたものだ。そこで私が思い出したのは、『007』シリーズで初代ジェームズ・ボンド役を6作も務めたショーン・コネリーが、ずっと後になってからソ連の原子力潜水艦の艦長役を務めた『レッド・オクトバーを追え!』(90年)だ。同作は冒頭、海江田と同じように、御目付役のソ連共産党の幹部を殺害して「レッド・オクトバー」を乗っ取ったショーン・コネリー扮するラミウス艦長が「米国への亡命」を目指したが、さて、米太平洋艦隊から無事離脱した〈やまと〉と海江田の今後の狙いは?

大沢たかおが超個性的な秦国の大将軍・王騎役を演じた『キングダム』は、第1作『キングダム』(19年) (『シネマ43』274頁) の成功後、第2作『キングダム2 遥かなる大地へ』(22年) (『シネマ51』158頁)、第3作『キングダム 運命の炎』(23年) (『シネマ53』217頁) とシリーズ化され、今後もそれが続く予定になっている。それを考えると、原作漫画が32巻もある『沈黙の艦隊』も、第1作たる本作が成功すれば、シリーズ化されることは確実だ。本作では、米国大統領ニコラス・ベネットは1シーンだけしか登場しなかつたが、原潜〈やまと〉がアメリカ本土近くに現れ、海江田が米国大統領との首脳会談を申し込んだら、ベネット大統領はどうするの?今後そんな展開も想定されるはずだから、ぜひ第1作を成功させ、シリーズ化してもらいたいのだ。そんな中で、少しづつ海江田の狙いも見えてくるはずだ。

2023(令和5)年10月12日記